最優秀賞

笑顔溢れる未来

群馬大学共同教育学部附属中学校　三年
恩田　康成

大人が起こした戦争。犠牲になる子どもたち。テロや空爆によって家を追われ、ミサイルの破片によって血だらけになった子どもたちの姿が、連日のように報道されている。

皆さんは、五年後十年後の自分たちの未来をどう描きますか。私は、日本にいる限り、平和や幸せな未来が待っていてくれると、信じて疑わなかった。少なくとも、曽祖父の話を聞く、その時までは。

曽祖父が施設へ入ると聞いた。私は入所する前日、曽祖父に呼ばれた。正直に言うと少し面倒だった。きっといつもと同じ、「お父さんとお母さんの言うことをよく聞いてな」というやりとりが想像できたからだった。でも、今回は少し違っていた。何やらノートらしき物を出してきて、「自分史を書き出したんだが、手が震えてしまって、これ以上進まなくてね。康成が十四になったと聞いて、あの東京の空襲の時、ちょうどおじいちゃんもそれくらいだったと思ってな。自分史に書くつもりでいたことを康成に話しておきたいんだ。」と言うのだ。日頃口数の少ない曽祖父の覚悟のようなものを感じ、緊張した。

一九四五年の東京大空襲の時、曽祖父は家族と東京で暮らしていた。三月十日、B二十九が住宅地に焼夷弾を投下した。二時間で十万人もの人が亡くなった。

「あの時は家から飛び出て、火の中を夢中で逃げたんだよ。気がついたらお父さんとおじいちゃんの二人だけだった。お母さんははぐれてしまったんだ。それからおじいちゃん、毎日毎日お母さんを探して歩いたんだ。お母さんに似た背格好の人を見ると、走って追いかけていった。でも、見つからないまま。それっきりだ。」

私は喉がからっからになった。曽祖父はどうして今までこの事を話さなかったのだろう。私は、「初めて聞いたよ。その話。」と言うと、「思い出したくもなかったからね。でも、自分の歴史を書き残したいと思った時、

この事を書かなくては、おじいちゃんの歴史とは言えないと思ったんだよ。明日施設に行く前に、おじいちゃんの記憶が確かなうちに、未来の担い手である康成に、伝えておきたいと思ったんだ。

両親を亡くし、シラミとアカだらけの浮浪児が、死のうが生きようが、大人は自分のことで精一杯。

「これが戦争だよ。」

そして、

「戦争なんて、おじいちゃんたちだけでたくさんだ。」

と言う曾祖父の目から、シワをつたって涙が落ちた。この涙が私の今を創ってきたんだ。

ウクライナやガザでは未だ恐ろしい紛争下にあり、子どもたちは命を奪われ最愛の家族を失い続けている。曾祖父の見た、あの地獄だ。この地球のあちらこちらで子どもたちの笑顔を奪い続けている。

世界は繋がっており、私たちは一緒に生きているのだということを忘れていませんか。

平和な未来は神様からの贈り物なんかじゃないんだ。

私は生徒会の経験から学びを得た。対話を続けていくと、互いを知ることで信頼や尊敬の気持ちが生まれ、相手の話に耳を傾け、仲間と合意形成することにつながった。

戦争を防ぐためには、気の遠くなるようなエネルギーと、多くの人の思いが必要だ。だからこそ、対話をしたい。

対話を広げ、皆が納得した目標を共有することで、安心で生きやすい笑顔溢れる未来へと変えていけるはずだ。

私もいつの日か孫に伝える日がくる。

「国を越えて仲間を作れ。世代を超えて、共に学びその想いや考えを語り合える仲間を作るんだ。自分も誰かに支えられ、そして誰かを支える、そんな対話ができる世界をもっともっと広げていくんだ。」

「対話は心と心をつなぐ架け橋だよ。」